

世界観の生成

阿部 矢 二

一 生産・労働の進歩性

二 階級社会における勤労人民の状態とその意識

三 社会発展法則の客観性と階級的利害関係

一 生産・労働の進歩性

人類は道具を使つて労働するようになった進化のその段階にいたつた時、はじめて、ほかのすべての生物からはつきり区別される場所の人間として、みずからを創造した。その時以来何万年を生きついできた人間の生活の歴史は、額の汗のかわくまのない労働によつてささえられ、おしすすめられてきた。人間は考えるまえに食べなければならぬが、食べるまえに食べる物を生産しなければならぬ、というわけで、生産Ⅱ労働は人間生活の不可欠の条件であり、第一の欲求でもある。それゆえ、人間の生活の歴史・社会の発展史は、生産Ⅱ労働の仕方様の変遷発展の事実上の過程と不可分離の・相互連関の關係において把握されるべきである。

労働の過程で人間は、外界―自然と社会―をつくりかえつつ、同時に自分自身―肉体と精神―をつくりかえ

る、そして、また、外界と人間自身の改造・変革は労働の生産性の向上、変革をひきおこす。この関係は内部的に相互に関連しあうが、労働の生産性は労働を絶えずくりかえしおこなうその過程のうちで高まるという性質のものなのだから、結局、労働の生産性の昂揚ということがおもな動因となつて、外界と人間とがともに変革され進歩するということになる。

労働の生産性 生産諸力の向上発展とともに、あるいは、その向上発展によつておしすすめられて、外界と人間が変革され、やはり上昇線をたどつてゆく、人間の生活はこの恒久的なうごきのうちでいとなまれている。この事実が承認されれば、人間生活の歴史・社会の歴史は、生産諸力の発展によつて推進され、かつ、生産諸力の発展のそれぞれの段階に照応するという原則、それに、歴史のうごく方向は必然に進歩の方向だということも、あわせて理解されるべきはずである。が、この理解のためにさらにちちいつて論をすすめよう。

自然科学の諸成果によつて、有機物は無機物から発生産展したものであり、有機物の発展のある段階で生命現象と感覚が発生したということが知られた。生物としての人類が現にもつようになつた高度の感覚や意識も、いく万年かの生物進化の過程の産物であり、その久しい過程を通じて今日の発展段階にたどりついたのだとすれば、感覚・意識・知覚など、およそ観念的なものは、一次的・本源的存在たる物質にたいし二次的・派生的なものだということがおのずからわかるであろう。唯物論はこの認識のうえにたち、科学の諸成果と一致して次のようにいう。「物質は一次的のものであり、思想・意識・感覚は極めて高度な発展の産物である。¹⁾」唯物論のこの認識は、人間の意識にかかわりのない物質・外界の独立の存在をみとめ、意識のほうは「外界の映像にすぎない²⁾」ところの二次的・派生的存在であるということを教える。マルクスはその著資本論の「第二版への後書き」のう

ちでいつている。「反対に、観念的なものは、人間の頭の中で転変され翻訳された物質的なものに他ならない。」³⁷⁾

それゆえ、唯物論の立場は、われわれ人間の知識は感覚器官によつてとらえられた物質・外界を源泉としたものであり、物質・外界のうちにまつたく根をもたない観念的なものは存在しない、それは映写される対象なしではどんな映像もありえないのと同じ道理であるということの承認に帰着する。この道理はわれわれの生活のうちで、どう現れるかというに、それは次のようである。

すなわち、人間は生活を続けるためには労働・生産を続けなければならないのだが、この生産の活動は自然のうちで直接間接物質を対象としておこなわれる。労働しているときには、だから、人間の感官、神経、脳髓、筋肉は自然・物質あいてに緊張して働きかける、そしてこれらの諸器官は、また、労働の対象からいろいろの刺激、反作用、抵抗などの雑多な反応、影響をうける。このような労働・生産をくりかえし継続しているその過程で、人間は感覚器官と自然・物質との接触を通じ、諸器官がうける雑多な反応、影響などをもとにして、自然・物質のいろいろな性質を知るようになる。このような経路を通る方法によるほか、人間は自分自身についても外界についても何等の観念、知識もえることはできないのである。

これを簡単に表現すれば、物質についての観念や知識は、本源的には感覚器官を通じて脳髓に反映された客観的实在・物質の映像——「観念的なものは頭のなかで転変され翻訳された物質的なもの」——だということになる。感覚は、認識の最初の源泉、最初の形態であるといわれるのもこの事実によるのである。

そこで、人間の生活・生産と認識とは生活・生産の実践過程のうちで、相互に関連し作用しあつて、一方が他

方を、他方が一方を、高め深め、豊かにし広めてゆくような関係に結ばれているということがわかる。労働・生産の不断の実践過程が、同時に認識の深まり広まりゆく過程だという事は、労働・生産そのもののうちに労働の生産性と生産諸力の発展のモメント——外界に関する認識の深化すなわち科学の進歩——が内在しているということを示すものであり、結局、人間の生活は生活すること自体——働きつつ考えること——によつて、高められ、豊かにされ、一路向上線のうえを前進するように方向づけられているのである。

自然・外界のうちにあつていとなむ人間生活のすがたが労働なのだが、このことは生活欲求は自然と人間との間の闘争なしでは充足することができないことを示す。人間の欲望にたいし積極的に妨害したり、消極的に拒否したりする自然に対抗して、自然の抵抗と物惜みを克服するために、人間は労働の生産性を高め、自己についての認識を深めていくのだが、生産性と認識の一層の進展とはそれ自体、さらに大きい多様な欲望を——それらの欲望の不充足感を——あらたに生みだす原因となる。このような生産の発展の動機——欲望の不充足感——とその結果——あらたな欲望の創造——との間の矛盾は、同時に人間と自然のあいだに存在する矛盾である。

このような矛盾が存するかぎり生産は絶えず発展し続け、科学もまた生産発展との関連において発展してやむことはない。人間生活の歴史をつらぬくすべての進歩性の源泉は、人間の物質的生産諸力の発展の仕方そのもののうちに在るのである。

「社会の発展がある方向をもっているのは、人間は永久に自然と矛盾する関係のうちに存在しているからである。この矛盾が永久に存在していることによつて、人間はその生産力を向上させようという傾向を永久にもつことになる。そして、この傾向が作用しているために、社会的生産力と生産関係の間には次から次へと矛盾が生じ

てくる。

人間の社会的進化の方向は、人間が自然をますます支配するようになってゆく方向であり、社会の運動がこういう方向をとるのは、まさに人間生活の自然的諸条件、すなわち、ひとびとがその要求を満足させることを必要とするところから経験する変化への衝動および発展のせいにはかならない。」

労働と生産とに不可分に結びつけられたところの人間生活の客観的事実、この事実のうちに人間生活の進歩、向上へのすべての条件、動因がふくまれている。そして人間生活のそれぞれの様式は、人間の意識から独立に存する、先行世代から伝承されたところの、生産力の一定の発展段階によつて規定されるという法則は、人間生活発展の内部的関連があるがままに表現したものにすぎない。そこで、人間の生活様式を総合的に体现した社会体制もまた、久しく不変のまままで維持されるものではなく、絶えず発展する本質をもつた社会の生産とともに、進歩の方向へ上昇運動を続ける必然性—変革の必然性—を負わされたものだということの認識が、事実と論理とに一致して、自然にえられるのである。

結局、人間生活の歴史は「物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係」が、人間の意思から独立に存在することの承認を土台とし、この客観的存在のうちにある連関と依存関係、すなわち、客観的法則の発見によつて、進歩へむかう必然の運動として、はじめて、科学的に把握されうることになつたのである。

註

- (1) レーニン「唯物論と経験批判論」永田広志訳・社会主義著作刊行会版 八七頁
- (2) 右同書 七九頁
- (3) 長谷部文雄訳「資本論」第一部・青木書店版 八六頁

- (4) モーリス・コーンフォース著・弁証法的唯物論入門・第一卷「唯物論と弁証法」理論社版 二〇三頁
(5) マルクス「経済学批判・序言」マルクス・エンゲルス選集補巻3 三頁

二 階級社会における勤労人民の状態とその意識

社会はその発展の過程において、飛躍の段階—階級社会では革命の段階—を経過するが、この革命は「生産関係は生産力の性格にならず、照応する」という社会発展の経済法則が、それぞれの社会体制のもとで発展した生産力の水準に應じて、自己を貫徹する仕方である。

すべての運動がそうであるように、社会の運動—発展—も社会自体のうちには生まれられた矛盾によつておこる自己運動なのだから、社会革命は人々の主観にはかかわりなく、その希求、願望、憎悪、悲嘆をよそにして、必然におこる。革命が外国から密輸入されるといつたり、少数野心家の煽動でおこされると考えたりするものもいるが、彼らは史的唯物論についての自分の全くの無知を恥しらずにも、みずからばくろしているだけのことである。

とはいえ、革命運動は人民大衆の社会的・政治的運動なのだから、社会的、政治的、また経済的利害についての要求を獲得しようとする意識的、主観的な人民の行為であることも事実だ。しかしながら、人民が自分らの利益にさそわれてではあるにしても、生命をかけて革命戦線に大衆的に参加するというのには、革命によつて約束される利益が、人民大衆に生命をかけるに値すると確信させるほどのものでなくてはならない。

かような利益は個人によくアツピールするとはいえ、同時に大衆を革命にふるいたたせるにたる偉大な動員力をもつものだから、決して個人的、私的、主観・恣意的な利益とはいえない。それは、必ずや、社会の運動

法則がさし示す方向へ社会を前進させることによつて、すべての勤労人民がきんてんすべき社会的な、客観的に規定されたところの利益であるにちがいない。

すなわち、飛躍しようとする生産力の要求は、おくれた、桎梏化した生産関係を破壊し除去することだが、勤労人民の大衆的利益は、まさにこの破壊に一致するのである。飛躍しようとする生産力は、自己の性格に照応する新たな生産関係を必然に要求するのだが、生産力のこの必然の、客観的な要求は、とりもなわず勤労人民の直接の個人的利益に合致し、かつまた、勤労階級の階級的利益——この階級の解放——をそのまま現したものである。このようにして、社会の發展法則は人々の個人的 主観的利益の意識を通して自己の必然性を貫徹するのであり、この場合における人々の意識としての主観性は、無意識のうちに、まさに、社会的客観性のうちに統一され、勤労者の主観的利益は、客観的な社会發展法則の要求に合致する場合にのみ合法則性とその実現の可能性——客観性——を獲得するのである。この点については「問題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、あるいはすくなくともその生成の過程にあるか、の場合にだけ發生する……」¹⁾というマルクスの至言を思いおこすべきである。

さらに、革命——現存秩序の破壊——にたいする勤労人民の要求の客観的必然性は、人民の階級的存在そのものうちに認められる。

搾取され弾圧される勤労階級としての人民の、生涯にわたる生活は、人民をどうしても支配・搾取階級の打倒に駆りたてないではおかないの非人間的なものであり、いやくも人間たることに權威を感じるものならば、²⁾とてそのままでがまんできないものである。勤労者がいやおなしに押しこまれるこの現実のいとうべき

階級的的地位、この物質的・客觀的条件そのものうちから、搾取者、支配者にたいする彼らの憎悪、憤激、敵意が必然的に生れ、革命による現状の打破、かかる呪うべき階級的的地位からの解放、にたいする彼らの翹望、敏喜、要求、努力が、これまた必然的に生れる。これが人民の意識的、主觀的願望ないし行動の物質的、客觀的基礎なのである。

人間の意識の源泉を物質のうちにもとめ、感覺は物質の映像だとする唯物論の根本的命題は、史的唯物論のうちにも取ち入れられ「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。」²⁾という型で定式化されている。この考え方は次のように、個人の運命を階級に結びつける。

「階級は個人にたいしても独立化し、その結果、個人は彼らの生活諸条件をすでに予定されたものとしてみだし、彼らの生活的地位、これとともに彼らの一身上の發展も、階級から運命づけられたものとしてうけとり、階級に従属するにいたる。このことは、分業への個々人の包摂と同様の現象であり、私的所有と労働そのものの揚棄によつてのみとりのぞくことができるのである。」³⁾

これによつて考えると、プロレタリアートや貧農の意識が、彼らのおかれた社会的地位、その地位における彼らの物質的生活によつて、反ブルジョア、反地主的に規定されるのは理の当然である。したがつて、プロレタリアの反資本家的感情を煽り立て、燃えあがらせることによつて、社会を前進させるやかたは煽情的にして、しかも、合法的だといえる。これに反し、労資協調主義は、資本家にたいして非資本家的・人間的温情を、労働者にたいして反プロレタリア的妥協と奴隸的従順とを求めがゆえに、合法的ではあつても合法的ではなく、

あきらかな背理である。協同的社會民主主義がとかくプロレタリアに疑惑視され、彼らの全面的信頼をからえないのはこの主義に生来の合法性と非合法則性とのゆえであらう。

「人民の極度の貧困状態は、共産主義のための温床だ。」という言葉は自由諸国の指導者たちの口からも、ときどきもらされるが、人民に反資本家的感情をおこさせ、彼らを階級闘争に駆りたてずにはおかないところの、彼らの恥ずべく憤ろしき階級の地位―共産主義の温床―とはどんなものか、まず、エンゲルスの古典的名著「イギリスにおける労働者階級の状態」にたずねてみよう。十九世紀なかばのイギリス労働者階級の社会的生活のありさまは次のようだった。

「このように労働者は、肉体的にも、知的にも、また道德的にも、権力をにぎっている階級からおしのけられ無視されている。労働者にたいしてはらわれている唯一の心づかいは、彼らがブルジョアジーの感情を害しすぎるときにはたちまち彼らをしめつける法律である―彼らにたいしては理性のない動物を相手とする場合のようにただ一つの教育手段しか適用されない―、つまり鞭である、なつとくさせるのではなく、ただおどしつける一方の残酷な暴力である。

だから、このように動物のようにとりあつかわれる労働者がほんとうに動物になつてしまふか、あるいは、ただ権力をにぎっているブルジョアジーにたいするきわめてはげしい憎悪、内心の不断の憤激によつてのみ人間としての意識と感情をたもつことができるとしてもおどろくにはあたらぬ。

彼らは支配階級にたいして、憤怒を感じているあいだけ人間である。彼らが自分を束縛するくびきを辛抱よくにない、そのくびきを自分からうちやぶろうとはしないで、ただそのくびきのなかで自分の生活を快適なも

のにすただけに努力しはじめるといふや、彼らは動物になる。」⁴⁾

労働者の資本主義社会においておかれている地位、その地位におかれたものにたいする社会の取扱方、それは人間にたいしてではなく、動物にたいしてのみふさわしいものである。だから、労働者は人間性をあきらめないかぎりは、支配階級にたいして「憤怒」しないわけにいかないのである。労働者の資本家にたいするこの憤怒は階級闘争の主観的な導火線であり、資本主義社会における彼らの階級的地位は、階級闘争の物質的・客観的地盤をなすものである。

「労働者のあいだにみられる墮落のもう一つの根源は、彼らが労働を、そののろわしい運命としてあてがわれていることである。……強制労働はもつともつらい、もつとも人の尊厳をきずつける苦痛である。毎日朝から晩までいやなことをしなければならないことほどおそれるべきことはない。そして、労働者が人間的感情をもつていればいるほど、彼には自分の労働がいつそいやなものとなるにちがいない。というのは、彼は、その労働のなかにひそむ強制を、その労働が彼自身にとつてなんのやくにもたないことを感じるからである。

このような労働をするようにさだめられることは、……人間を動物にまでひきさげることにならないだろうかこの点でもまた、労働者にはつぎの二つの道しかない。つまり、自分の運命に服従して『よい労働者』となり、ブルジョアの利益を『誠実に』まもるか、—そのときには彼は動物化することはたしかである—、それとも反抗して、自分の人間性をまもるためにできるかぎりたたかうかである。そして、この後者のほうはブルジョアと闘争のうちでのみなしうることである」⁵⁾

労働者は勿論人間なのだから、動物に墮落することに反対して「人間性をまもるためにできるかぎりたたかう」

ことの方を当然に選ぶ。この戦いにおける労働者側の勝利は、彼らが歴史の法則にしたがつて、合法的に歴史を前へおし進めるために戦っているのだという事実によつて予約されているし、また、歴史の現実によつても証明されている。

「上流階級にたいする労働者のはげしい激昂……この激昂、この憤怒は、むしろ労働者が自分らの状態の非人間的なことを感じて、動物にまでおし下げられまいとしていること、いつかは彼らがブルジョアジーへの隷属から自分自身を解放するであろうことの証明である。」⁶⁾

エンゲルスはこの著書の序文のうちで「労働者階級の状態は、現在のすべての社会運動の事実上の地盤であり出発点である。なぜなら、それこそ現代におこなわれている社会的悲惨の、最高の、もつともろこつな頂点となつているからである。」⁷⁾といつているが、そこにはすでに、問題の唯物論的つかみかたが明確に示されている。

なお、エンゲルスは「この私の著書のようにすべて、労働者を論じた書物はただの一冊もない。」⁸⁾と書いているとおり、彼は「プロレタリアートがただ苦難する階級であるにとどまらないこと、プロレタリアートがおかれてある恥ずべき経済的地位、ほかならぬその地位がさからいがたい力で彼らをまえへすすませ、おのれの終局的解放のためにたたかわせることをかたつた最初の人であつた。」⁹⁾

ほば、エンゲルスのこの著作と同時期にマルクスもまた次のように同じ見解を述べた。

「なんら社会の利益をうけることなく、しかも社会のあらゆる重荷をおわなければならない一階級、社会からしめだされ、他のいつさいの階級にたいしてもつとも決定的な対立へ強制的に駆りやられる一階級が、つくりだされる。この階級は全社会成員の大多数から構成されるものであり、また一つの根本的な革命の必然性の意識、

すなわち共産主義的意識の源泉をなすものである。¹⁰⁾」

外国の帝国主義とその手先きである買弁資本と軍閥、官僚および封建的地主との極端にひどい搾取、暴圧のもとにおかれた解放以前の中国農民、労働者の状態はエンゲルスが描きだした十九世紀なかば頃のイギリス労働者階級の状態よりもさらに幾倍も劣悪であり、惨澹たるものであり、絶望的なものであつた。だから、その状態をときほどくことができるのは「朱毛」の軍隊—人民解放軍—だけだというほどのせつばまつた状態だつた。すなわち、中国人民の物質生活そのものうちに、中国革命の奥深い根源があつたのである。

「この暗たんたる農民の絶望感、あるいはむしろ、人生という苦患にたいするあきらめといった方がよいかも知れないものも、『朱毛』という一人の百姓が、『貧乏人の軍隊』をひきいて、郷紳とたたかっているといううわさが、東や西からつたわつてくるにおよんで、春風のもと氷のようにとけはじめたのだ。¹¹⁾」

スメドレー (Agnes Smedley) の「偉大なる道—朱徳の生涯とその時代—」によると、朱徳將軍（一八八六年・四川省生れ）は「私が生れるまぎわまで、母親は米をたいていたそうだ。たけぬうちに私は飛び出してきた。母親は、生むとすぐ起きて、たきつづけた。」¹²⁾ というほどの貧しい農民の子として生れ「いつもすき腹で育つた」△偉大なる道「上・一七頁」のであり、その家族の暮しは「夜になつて灯をともしずなどは、言語同断なぜいたく沙汰だつた。……まあ、時として朱家の男たちは、一本のキセルにタバコをつめて、みなの間を順々にまわして、一人が一口ずつ吸うというのが、山々だつた。¹³⁾」というふうだつた。朱家が例外ではない、例外は地主だけで、一般農民はすべて「すき腹で食卓を去る」程の乏しい食生活だつた。生命をつなぐのに絶対に欠くことのできないのは塩分だが、その塩のたべかたについて朱徳將軍の話をところを讀むと、農民はまるで塩を消費するの

を厳禁されている状態で、塩味を僅かに味つているとしか思えない。

「四川では塩がとれるが、ひどく高かつたから、貧乏人はできるだけ引きしめて買った。私たち貧乏人のための、石ころみたいな黒い色をした汚れたやつ。塩はこの上ない貴重品だつたから、料理に使つたりはしなかつた。食卓のまん中におかれた鉢の湯に溶かして、みなはその野菜をそれにつけて食うか、やはり食卓の真ん中の鉢に、かたまりのままおかれて、みなはぬれた野菜をそれにこすりつけてから食うかした。¹⁴⁾」

食生活の乏さは、生活全体の乏さの総結果を示すものだ。貧乏な人民は、食を切りつめその乏さをがまんするまえに、食物以外のありとあらゆる必需品の消費を切りつめる。だから、食生活以外の生活面が「人間以下的」なのは当然のことである。江西省南部における農民の生活状態は次のようだつた。

「陰気な小屋には、入口は一つしかなく、窓さえない。小屋のなかの寢床といえは、地面にじかにしいたわらむしろか、木の足を十文字にのばした上に板をのせ、そのうえにわらをつみ重ねただけのものかである。

そして、このわらが、しき布団でもあればかけ布団の役割もつとめるのである。人民はあまり貧しくて、かけ布団をかけるなどというぜいたくなことができないので、もつているかぎりのきもの—何回も何回もつぎはぎをしたゆるいズボンと、上着とを着たままで眠るのである。¹⁵⁾」

このような、人間としてはほとんど耐えられない物質生活を、中国の大部分の人民がしいられていたのだが、こんなひどい窮乏に人民を追いこむほどの苛烈な搾取を続けるためには、支配階級はむきだしの暴力によつて、人民の抵抗を抑圧し弾圧しなければならなかつた。国民党の一方独裁政治とは、中国の人民を人間としてではなく、むしろ、動物として取扱ひ、処置する政治だつたのである。だから中国独裁者の御主人・外国の帝国主

義者は正直にこの事実を認め、中国人と犬とを同様にみなし、犬と中国人とにたいして公園への立入を平等に禁止したではないか。

一九二七年以後、全面的に反革命に転じた中国の国民党政権は、反帝の旗をすて、反共のスローガンをかかげて自由諸国と手を握りあつたが、彼らのいう反共なるものは、共産主義に反対すると同様に、生活をまもるための人民の権利にたいするすべての要求に反対し、これを残酷に圧殺してしまふ政治、つまり反人民的―資本家地主的―独裁政治を意味する。けだし、共産主義は人民を、動物としてではなく、人間としてあつかえという人民の要求に耳をかたむけ、餓死凍死の恐怖からの人民の「自由」を要求するものだから、反共が、このような人民の要求と自由とに反対する政治になるということは理の当然であろう。自由も独裁も、階級的立場の相違にしたがつて、まったくその意味を逆転してしまふのだから、人民の側にたつてみなければ進歩の方への展望は一切きかないということになる。そこで、解放前の中国―自由だつた中国―の反共政治の一端を見よう。

「上海や漢江、広東、その他の都市では、演説、新聞、集会の自由、組織の権利を、要求したというだけの理由で、また、逮捕されたとき、法廷で自分を弁護する権利を要求したというだけの理由で、労働者やインテリが、路上で、首をきられていたのだ。『帝国主義』ということばを使つたものは、だれであろうと、ただそれだけで、共産黨員だという烙印をおされ、つかまれば、殺されたのだ。八時間労働制や、賃金のひきあげ、児童労働の禁止などを要求してさえ、いつさい、共匪ときめつけられたし、労働組合の自由という思想も、もちろん同じ結果をまねいたのだ。¹⁶⁾」

右のような政治的無権利の状態で弾圧され、不安と窮乏のどん底で、余儀なく暮さざるをえない労働者農民

は、民主主義の諸権利を手にいれ、すこしは人間らしい暮しができるようになるためには、いつたいどうしたらいいのか。彼らの人間的欲求は、反共・反革命政権によつて、ことごとく共産主義・「赤」と見られるのだつたら、彼らは人間的欲求をもつかぎりは、どうしても共産党のもとに走つて赤とならざるをえないのではないか。地主に虐げられ資本家に絞られていた旧中国の農民・労働者が反革命の陣営にはなく、革命の側に加担するのは水が低きに流れるのと同様の自然さではあるまいか。もつとも無学で単純だつたとみられる彼らが、銃をとつて反革命政府を打倒して、権力を自分たちの手に奪い取る場合だけに、彼らの解放が期待されると思ひこんだのも、まことにもつともなことであつたのである。「毛沢東とわれわれ多くものは、はじめから、中国の人民が、民主主義の諸権利をかちとることができるのは、外国帝国主義の下僕である反革命勢力を、武力によつて打倒したときだけである。と考へていた。……」

地主の支配のもとに暮らしている、もつとも単純な農民、あるいは、国内と外国との反動どものむちのもとで働いている、もつとも単純な労働者は、このことを、よく知つていた。¹⁷⁾」

この人民のうちの革命的動向を見ぬいて、それに方向と方法をあたえたのが、中国共産党だ。党の・人民勢力の不败についての確信は、けつして、独りよがりのせまい主観的盲信ではない。それは、党の指導理論―マルクス・レーニン主義の中国革命への適用―の正しさと、中国農民・労働者のおかれた経済的・政治的状态―それは「中国の農民は、地球上でもつとも革命的な人民だ」という認識を当然とするような状態だつた―によつてその客観性の基礎をあたえられている。きわめて総括的にいえば、勤労人民の欲しているものを、彼らの階級的存在の諸条件にきいてえさせようというのがマルクス・レーニン主義の原則なのであり、この原則の客観性は

どんな力をもつてしても枉げられないのである。¹⁹⁾

註

- (1) マルクス「経済学批判・序言」大月書店版 マルクス・エンゲルス選集補巻3 四頁
- (2) 右同書 三頁
- (3) 前出マルクス・エンゲルス選集第一巻・マルクス「新世界觀の成立」 六二頁
- (4) 前出マルクス・エンゲルス選集補巻2・エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」一七六一—一七七頁
- (5) 右同書 一八三—一八四頁
- (6) 右同書 一八二頁
- (7)(8) 右同書 一一二頁
- (9) レーニン「マルクスとエンゲルス」第一冊・国民文庫版 八〇頁
- (10) 前出マルクス・エンゲルス選集第一巻・マルクス「新世界觀の成立」 八三頁

レーニンも同じように貧窮と圧制とを、人民の革命性の根源だと見ている。

「貧農のこれまでにない貧窮化と零落のもとでの、賦役経済の膨大な遺物と農奴制度のありとあらゆる残存物とは革命的農民運動の奥深い源泉を、大衆としての農民の革命性の奥深い根源を、完全に説明している。」「ロシアにおける資本主義の発展」レーニン全集第三巻・大月書店版・九頁

- (11) 「偉大なる道」下・岩波書店版 一四頁
- (12) 右同書・上 一三頁
- (13) 右同書・上 一八頁
- (14) 右同書・上 一七頁
- (15) 右同書・下 一三頁

(10) 右同書・下 一一頁

(11) 右同書・上 二二六頁

(19) 人民のおかれてゐる階級的地位から必然的に発せられる声にきくという原則を、朱徳將軍は次のように自然なものと述べてゐる。「われわれの経験からいつて、渴いた人が水をほしがるように、飢えた人が食べ物をほしがるように、人民が民主主義を欲していることはつきりしてゐるし、民主主義を人民がことわたためしは聞いたことがない。」
〔偉大なる道〕下巻 一六九頁

三 社会発展法則の客観性と階級的利害關係

社会の發展一般を規定する法則―「生産關係は、生産力の性格にかならず照応する」という法則―は、すでに説明したように、労働し生産する人間の生き方、そのものうちにある客観的關係を頭腦が写したものだといふにとどまる。そして、頭腦に写しだされたこの映像の正しさは、事実と実践によつて証明されている。それゆゑ「生産關係の生産力への照応」法則は、自然科学の諸法則、たとえば地球の自転、公転についての法則と同様、人間の意思からは独立に存在する、客観的真理として受けとられるものである。

いまとりあげてゐる社会發展の法則は、社会發展の歴史の事実によつて、その客観的科學性を檢証されてゐる。すなわち、社会は太古から不変の体制を維持してきたものではなく、奴隸制、封建制など根本からちがう社会体制をつぎつぎに経過し、近代にいたつて資本主義の社会体制をとつた。この史実にたいしては、誰も眼を閉じるわけにいかない。

さらに次の事実を指摘することができる。この社会体制のつぎつぎの変革のたびごとに、社会の生産力が、また、飛躍的に発展したという事実である。社会体制の変革は、その土台に生産関係の変革からひきおこされる。そして、生産関係の変革は、また、たえず、一層のびようとする生産力そのものの存在の仕方、生産関係が照応してきた結果にはかならない。封建社会の崩壊は、この社会の胎内で発展した商人資本の、産業資本へのさらに高度の発展要求に迫られておこつたものだが、封建社会の土台だつた生産関係の主軸に封建的大土地所有の否定のちに成立した工場制生産・資本家的商品生産の様式が手工業の生産様式にくらべて、どれほど素晴らしい生産力の飛躍を実現したか、それは万人によつて認められるとおりである。

これらの史実——社会体制の継起的変革、それにとまらざる生産発展の史実——によつてその科学性をたしかめられたところの、この社会発展の法則が、現代に在るまでの生産と人知の発展の総成果として、われわれにあたえられたところの客観的真理なのである。この法則は階級に分裂した社会においては、搾取される階級の解放をもなつて発現する。というのは、生産力が発展するためには、直接労働を担当する階級により、大きい自由がどうしても与られなければならないからであり、かような生産関係の変革は搾取様式の変革、つまり、被搾取階級の解放にはかならないからである。事実、奴隷の解放をもたらしたのが、奴隷制の崩壊であつたし、農奴の解放は、すなわち封建制の崩壊であつた。農奴制は賦役経済のもとでおこなわれたのだが、この経済制度の「条件でもあり、結果でもあつたものは、技術のきわめて低い停滞的な状態であつた。というのは、困窮によつてうちひしがれ、人格的隷属と知的暗愚とによつて卑屈にされていた小農民の手で、経営が行われていたからである。」¹⁾といわれる通り、小農民の低い労働生産性に農奴制が照応していたのである。

このように低い労働生産性を停滞状態から解放するためには、小農民を農奴制の枷から解放しなければならなかった。そこで農奴の解放は、新しい生産力発展のための要求として必然のものとなつた。スターリンはこの關係を次のようにいつている。

「新しい生産力は、生産に従事する者が、虐げられた無知蒙昧の農奴よりも文化的で物わかりがよく、機械に通じて、機械がうまく動かせるようになることを要求した。故に資本家は、農奴制の束縛から解放された賃労働者を、機械がうまく動かせる程に文化的な賃労働者を対手とするようになつた。」

生産力の発展が新しい生産關係を、つまり、直接の生産者の解放を、要求するということは、社会の歴史の軌道が一路進歩の方向へ規定されていることを意味する。そして、歴史の齒車はけつして逆転しないということ、われわれの歴史そのものが示している。生産力発展の歴史は、同時に人間の自由の発展史でもある。また「自由とは必然性の洞察である」との見地からすれば、自由の発展は自然と社会にたいする人間の知識、科学の進歩との相互関連において実現される。その意味においても、歴史のうごきの進歩・前進性は疑いのないところである。

階級社会における生産關係は、同時にこの社会の搾取・支配關係を規定するものだから、その変革は搾取・支配階級と被搾取・被支配階級との利害に影響しないわけにはいかない。搾取と被搾取の階級關係においてはすべてについて、両階級の利害が相反するから、たとえば農奴解放は農奴には政治・経済的利益を結果したが、貴族・大地主には政治・経済的特権と利益との喪失をもたらしたというように、封建社会の生産關係の変革がおこなわれたのである。それで、階級社会の歴史は、生産關係が生産力の性格に必ず照応するという人間の意思から独

立した客観的な法則が、自己を実現する過程であるとともに、対立する階級の利害をめぐる階級闘争によつて推進される歴史でもある。

社会に関する法則は、自然に関する法則とかわらない客観性をもつものだが、その実現は、自然法則がひとりだけで作用するのはちがつて、階級的利害関係でうごく人々の激烈な闘争の結果によるのであり、この点に社会法則の自然法則とことなる特質が存在する。社会法則は人々の意識にかかわりなく存在するが、人々の意識的行動なしには実現しない。しかしながら、人々が階級の利益にうごかされ、その獲得のための意識的行動をするようになる動機は、けつして勝手気ままなものではない。それは物質的、客観的な基礎があつてそこから発生する。この基礎については、勤労者階級の耐えがたい窮乏、野蛮な非人間的生存とそれにはたいする人間性の反抗として既に記述した通りである。生産関係変改についての生産力の客観的な要求は、生産担当者の主観的な餓え、苦惱、憤怒、失望、希望、努力などのかたちをとつて必然的に表現される。さらに、生産力発展のための客観的條件——生産者の解放——は生産者の諸利益とつねに合致するという事実を考えあわせると、社会の運動は客観的な条件と主観的な条件との弁証法的統一として、物質と精神との、社会的進歩と個人的利益との統一として、その進歩性を実証するのである。だから、生産を担当し、生産力を高めることに利益をもつ階級の側に立つものにとつてのみ、次のような表現が客観性をもつものとして許されるのである。

「われわれの事業は、独立と平和と自由と幸福をもとめるすべての人びとの利益と一致しております。そのことのために、われわれがかならず勝利する保障があるのであります。」

階級社会の発展法則は、各階級の生活の仕方を反映したものであるから、必然的に生産、交換などに関係をもつ階

級間の利害につながりをもつ、したがつて、この法則の客観性は、それが階級的利益、不利益を結果としてもたらすということによつては否定されえない。直接の生産者は客観的法則に忠実にしたがつて行動する場合、生産力発展の方向にそつて合法的に行動する場合、にのみ自己の利益—人間性にたいする要求、階級そのものからの解放—を実現することができるのである。なお、主観と客観との根本的關係について、唯物論哲学の教えるところは次のようである。

「感覚が主観的であるのは、それがわれわれのなかでおこるからであるが、それは内容のうえでは客観的である。」⁶⁾

「私の感覚は主観的である。だがその根拠 (Grund) は客観的なものである。」

「概念は、感覚とおなじように、客観世界の主観的なすがたである。」⁸⁾

生産力の発展についての法則は、既に記したように、搾取し支配する階級にとつては最大の不利益—滅亡をもたらしすように発現するものだから、この階級の人々はこの法則の客観的必然性を認めることができない。階級的利害關係が、その認識を妨げこれを不可能にする。それゆゑ、支配階級は現在彼らに利益を与える生産關係を飽くまで維持しようとして、その永久の必然性を主張し、それを盲信し、生産關係の變革を目的とするあらゆる思想と行動とにたいして反対し、これを弾圧し窒息させようと試みる。この階級の反動性は、彼らが客観的法則の真理を認めえないで、逆に、真理をおおいかくし歪曲することに利益をもつところにその根源をおいている。この理由からして、搾取・支配階級のイデオロギーは党派的であるととも、客観的合法則性のない妄想ないし主観的願望に類するものとならざるをえない。現状維持を利益とする支配階級側には、その利益を保証する客観的

諸条件が欠けていること、ならびに、彼らには客観的な発展法則を認識する能力がないため、この法則にしたがつて将来を予見し、合理的に計画し、行動する可能性がまったくありえないことはあきらかである。そしてこの階級をこのような状態におい込んだのは、実に、経済発展の過程が生みだしたところの客観的諸条件そのものなのである。だから、進歩を拒みおくれた現状にかじりつくものは、新しく生れ、前へ進もうとするものに席をゆずるべき諸条件をみずからつくつて退いて行くことになる。

支配階級の階級の反動性は、たとえば、ヒットラーが「わが闘争」のうちでおくめんもなくいつている言葉「大衆の支持をえたいと思うなら、われわれは彼らをあざむかねばならない。」に露出している。これと本質的には変ることのない錯乱が一般的に見られる。

「資本主義の生産関係が生産力の性格に照応しなくなつたとき社会発展の客観的法則の作用をみとめること自体が、反逆的なものだとかんがえるようになった。

唯物論はブルジョア社会を社会的に震動させるすべてのものの原因だと宣言され、客観的法則という観念は叛乱を意味するようになった。⁹⁾」

「連関が洞察されるや、実践的崩壊にさきだつて、現存状態の永久の必然性にたいする理論的信仰がごとごとくくずれおちる。だからここにおいて、無意味な混乱を永久化することが支配階級の絶対的利益なのだ。そして、経済学ではなにも考えることはゆるされないと以外には、いかなる科学的な切り札も知らない誹謗の饒舌家どもは、こういうことのためでないなら、いつたいなんのために給料を支払われているのであろうか？」¹⁰⁾

客観的法則が「叛乱」を意味し、無意味な「混乱」の「永久化」を絶対的利益とするような階級に対立する他

方の階級を代表する側においては、事情はまったく正反對である。そこでは、客観法則の認識とその実現の努力が、社会の進歩と自己の階級からの解放に一致する関係にある。したがって、眞実をあげたことを本来の任務とする科学が完全に人民の利益に奉仕することができるようになる。¹¹⁾ 経済学についていえば、この学問は客観的眞理をおそれる理由をまったくもない、「人類の前進的な発展がまた自分の利益でもあるような階級」¹²⁾の立場に立つ場合、すなわち党派性に徹する場合にだけ客観的な科学になることができるのである。

眞実を虚偽で錯倒し、混乱させることを利益とする世界の支配者どもを揶揄しながら、スターリンはその党の方針の正しさと社会主義建設の成功との確証として、党の政策にたいする「資本家とその下僕たち」の気持ちがどのような「中傷」をあげている。眞実をおそれるものの側から激しく発せられるところの眞実にたいする中傷・デマが眞実の客観性の証拠だというのである。

「わが党の一般方針が唯一の正しい方針であること……、このことを証明しているのは、わが階級敵、すなわち資本家たちとその出版物、法主とあらゆる種類の僧正たち、社会民主主義者およびアブラモヴィチやダンのような型のロシアのメンシェヴィキが、さいきんわが党の政策にたいして気持ちがよいようにほえたてていることである。資本家とその下僕たちは、わが党を中傷している、——つまり、わが党の一般方針は正しいのである。」¹³⁾ 眞実は、いかにおおいかくそうとしても、ついに現れざるをえない。眞実をおそれるものの恐怖そのものが、最もあきらかにそのことを示している。

註

(1) レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」レーニン全集第三卷 一八二頁

- (2) スターリン著「弁証法的唯物論と歴史唯物論」広島定吉訳 二四三頁
- (3) 前出マルクス・エンゲルス選集第十四卷「反デューリング論」二三一頁
- (4) 野坂第一書記の紀念講演・一九五五年十一月一日刊「アカハタ」参照

(5) 主観的、意識的な人々の行動と客観的法則との関係については、次の文章を参考として引用する。

「生産関係は、イデオロギー的關係とことなつて、物質的關係であり、それは客観的現実である。

社会主義的生產關係は、ひとびとによつて意識的に設定されるものではないが、けつして恣意的に設定されるものではない。同志的協力および社会主義的相互援助の關係としての、この關係の性格は、ひとびとのたんなる主観的欲求によつてではなくて、生産力の客観的な状態によつて、生産の社会的性格によつて、決定されるのである。現代の生産力は、その社会的な適用と利用を要求している。社会主義的生產關係は、現代の生産力の社会的な性格と完全に適合しており、生産力發展の形態なのである。」(コンスタンチノフ監修「史的唯物論」上巻 二四四頁)

さらに、「プロレタリア階級は革命的階級であり、その実践的活動と死活の利害とは、社会生活の發展および變化の客観的諸法則の研究を要求する。」(ゲ・エフ・アレクサンドロフ著「弁証法的唯物論」第三分冊・青木書店版・六七四頁)なお同書六二三頁にも次のように記されている。

「マルクス主義は、万国の革命的労働運動の経験の一般化であり、プロレタリア階級の根本的利害の理論的表現である。」

- (6) 前出アレクサンドロフ著「弁証的唯物論」五九〇頁
- (7) レーニン「唯物論と経験批判論」一七五頁
- (8) 前出アレクサンドロフ著 六五七頁
- (9) 右同書 六四三頁
- (10) マルクス「クーゲルマンへの手紙」国民文庫版 八九頁
- (11) コーンフォース「唯物論と弁証法」二五四頁

「科学の第一の任務は、人間がその生産を改善し、もつと良くもつと豊かにくらし、ゆくのに必要な知識を人間に与えるために、世界のなかに作用している相互関連と法則とを発見することにある。」

- (12) ソ同盟科学院経済学研究所著「経済学教科書」第一分冊 一三頁
(13) ソ同盟共産党第十六回大会（一九三〇年）にたいする「中央委員会の政治報告」スターリン全集第十二卷 三六五頁

一九五六年一月七日 松ヶ崎の新小舎にて